The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 質問：臨床哲学に期待していること |
| Author(s) | 六郷, 颯志 |
| Citation | 臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 96-99 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/94565 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　第 10 回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「哲学に「臨床」は必要か？」

# 質問２：臨床哲学に期待していること

六郷　颯志

はじめまして。博士前期課程 2 年の六郷颯志と申します。今回のフォーラムにあたり、事前にご提示いただいた奥田先生の二つの論文や『倫理学という構え』(ナカニシヤ出版, 2012) などを拝見しました。その上で、ここでは主に私が臨床哲学の院生として抱いている研究上の問題意識と関連付けて、いくつかの点について奥田先生からご意見を伺う、という形で質問とさせていただきたいと思います。

## 事前資料をどう読んだか

まずはじめに、事前に触れた資料から私が奥田先生の「応用倫理学」をどのような研究姿勢を持つものとして理解したのかという点について、ごく簡潔にですが整理してみたいと思います（誤解等がありましたら申し訳ありません）。

奥田先生は二つの論文（「倫理学の研究倫理を考える」2021 年、「ピーター・シンガーはなぜあれほど憎まれてしまったのか？—哲学分野における〈応用〉的試み初期の倫理問題を再訪する—」2022 年。）において、（細かな言葉の差異ありますが）一貫して以下のように述べておられます。

> 問題に直面する当人にとっての当事（当事者的当事）は、倫理学者にとっての他事（非当事者的他事）であり、倫理学者にとっての当事（非当事者的当事）は、問題に直面する当人にとっての他事（当事者的他事）である。つまり、互いにとっての当事は、相手にとっての他事である、といういわば「大きなお世話」構造がそこにはある [1]。

ここで使われている「大きなお世話」という比較的ネガティブな意味を持つ言葉によって、奥田先生はご自身の研究に対する姿勢を端的に表現されているのではないかと感じました。『倫理学という構え』では上の「倫理学者」像について、より詳しく次のように語られています。

> ここで（思慮ある）「観察者」ではなくあえて「傍観者」としたのには意味がある。日

[1] 奥田太郎「倫理学の研究倫理を考える」『生命と倫理』（9 巻, pp.33-44.），上智大学生命倫理研究所, 2021, pp.40.

本語の「観察者」には、歪みなく客観的に正しく物事を見ようとする者という含意があるように思われる。しかし、倫理学者に求められる視点は、そのような完全無欠を理想とするものではない。むしろ、自らが当事者ではない問題にわざわざ首を突っ込んで、自分の語りが果たして正しいのかどうかに悩み呻吟しながら言葉を紡いでいく、その意味では無様な姿をさらす（そう、まさに、応援しているチームの闘いぶりに一喜一憂して無様な姿をさらす観客や見物人さながらに！）スタンスである。そうしたどことなく鈍臭いニュアンスを出すべく、「傍観者」という言葉を選んでいる[2]。（括弧内及び下線は筆者）

上のような記述から、「問題に直面する当人」の視点や「問題」そのものからはあくまで自己を分離し、それを（あるいは、そこから取り出されるより抽象的な問題を）専門家として醒めた目で研究（分析、解釈、議論等）する一方で、その行為自体が根本的に「大きなお世話」であるという自覚やそのことに対する葛藤を決して忘れない、といったことが、大まかに言えば奥田先生の応用倫理学者（ひいては哲学者？）としてのスタンスである、というふうに私は理解しました。（一応）この考えを前提として、次に私の研究上の問題関心に絡めつつ、奥田先生にいくつか質問させていただきたいと思います。

**臨床哲学に期待していること**

私は人が自分自身の体験から道徳・倫理などについての何らかの原理的なものを見出すということそのものに強い関心を抱いており、そのことについて深く知りたい（あるいは、少なくとも考えたい）と欲しています。少し具体的に言うならば、現状課題として取り組んでいるのはＶ・フランクルの読解です。彼の言葉は「生」や「人間」などについての一種の道徳的結論（奥田先生の言葉をお借りするなら「倫理学的思考」？）や、それを語る強い意志、語ることを通して（外的な生命の危機や自死の誘惑から）「生き延びる」といった状況などを反映しています。また、このような事態はフランクルに限らず、彼の同時代人たちや現代日本を生きる人々の言葉の中にも見出されるものでもあります（例えば、プリモ・レーヴィ『これが人間か』（1946）や、緒方正人『チッソは私であった』（2001）等）。

研究の主体としての私とその対象（他者の人生、言葉）という構図は思想研究の典型とも言えますが、これを敢えて「臨床哲学」で行う理由には私自身の研究動機が非常に個人的なものであるという事情が関係しています。端的に言えば個人的な共感が研究の動機の主要な部分を占めているということであり、「託して語る」ということを望んでいる面も（正直に言って）あります。「託して語る」とはあまりにおこがましい発想であると我ながら感じますが、他方で、それは一人の顔を持った人間として別の誰かの言葉を受け取り、敢えて自

[2] 奥田太郎『倫理学という構え 応用倫理学原論』ナカニシヤ出版, 2012.

分も「I（アイ）」という主語で語る態度へと繋がる道だと言えるのでははないかとも（少々苦しいですが）考えています。このように私の研究をめぐる立ち位置は混乱しているのですが、「当事者性マトリクス」に即して言えば、それは結局「当事者的当事」、「当事者的他事」、「非当事者的当事」、「非当事者的他事」といった複数の視点を一人の人間が行き来する可能性についてどう考えるのか、という問題であると言えるのかもしれません。

（あくまで私なりの前提ですが）「臨床哲学」は、奥田先生の比喩をお借りするなら、観客席の名もないサポーターであることを止めて、ともかくまず「私は〇〇といいます」と名乗り出ることから始めるといった一人称的な誠実さというか、筋の通し方を制度や方法以上に重視するものであり、そうした出来事が実際に起こる場所（現場）が「臨床」と名付けられているように思われます[3]。おそらく私は、こうした前提を持ち、その具体内容としては理詰めで得られる知識とは別種の「生きられている確かさ」[4]を（広い意味で）哲学的に捉えようとしつつ、そうした行為についてまわる「「声」と「聴くこと」、さらには「読み—書く」ことをめぐる血なまぐさい関係と制度の問い」[5]からも目を逸らすことなく、また他方ではやはり特定の立場に落とし込まれた人々の生き方の擁護を（敢えて、アカデミックに「書く」ことを通して）試みるといった「臨床哲学」の良い意味で錯綜した在り方に、自分の気持ちが自己満足の独白に終始せず何らかの形で意味あるものへと昇華されるのではないか？という淡い期待を寄せているのだと思います。

奥田先生が今回のご発表で指摘されているように、研究者として「当事者的当事」へと接近しようとすることに関する懸念として誰かの言葉を無自覚に簒奪してしまう可能性はやはり大きく、またそれは（やり方次第ではありますが）学問としての哲学・倫理学の破綻へと通じる道であることも一つの事実だと思われます（少なくとも、専門家同士で専門的知見として共有されることを前提として書かない、あるいは共有された専門的知見を考慮しながら書かないならば、それは文学作品と変わらない？）。

このような意味では、特に大学院生という初学者の身からすると、「思慮ある傍観者」という奥田先生の示されるスタンスは先ほどとは別の意味で「誠実」であり、かつ「手堅い」と感じる気持ちも正直に言ってあります。

以上のように、色々と悩みつつ臨床哲学に「身を寄せている」という私の状況を前提として、奥田先生に以下の二点についてご意見を伺いたいと思います。

① 「当事者性マトリクス」を「専門知の担い手」としての倫理学者の立場を明確にするた

---

[3] 鷲田清一『聴くことの力 臨床哲学試論』（TBS ブリタニカ, 1999）の 2 章 1 節「哲学の場所」における記述は、このような点について考える上での基礎を提供するものと考えられる。

[4] 鷲田清一監修, 本間直樹, 中岡成文編『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版会, 2010, p.3.

[5] ほんまなほ「あらがう、りんしょう、てつがく」『臨床哲学ニューズレター』（5 号, pp.9-28.）, 大阪大学大学院人文学研究科臨床哲学研究室, 2023, pp.12.

めの一種の尺度と仮定すると、倫理学者のなかには非当事者的当事のみならず、そのマトリクスの中を縦横に行き来する（複数の立場が重なり合う）在り方を生きる者がいるとも考えられ、むしろこのような在り方は一人の人間の姿としては現実的であると言えないか？

② 上と関連して、「思慮ある傍観者」として自らの特権性や「大きなお世話」構造を受け入れるという「覚悟」と並んで、最低条件として常に「臨床」（現場）に立脚することで自己の依拠する制度や方法論自体が破綻する可能性を受け入れる「覚悟」が存在すると仮定した場合、後者についてはどのように考えられるか。

どうぞよろしくお願いいたします。

**参考・引用文献**

緒方正人『チッソは私であった』葦書房, 2001.

奥田太郎『倫理学という構え 応用倫理学原論』ナカニシヤ出版, 2012.

奥田太郎「倫理学の研究倫理を考える」『生命と倫理』（9 巻, pp.33-44.），上智大学生命倫理研究所, 2021.

奥田太郎「ピーター・シンガーはなぜあれほど憎まれてしまったのか？−哲学分野における〈応用〉的試み初期の倫理問題を再訪する−」『臨床哲学ニューズレター』（4 号, pp-56-68.），大阪大学大学院人文学研究科臨床哲学研究室, 2022.

レーヴィ・P『改訂完全版 アウシュヴィッツは終わらない これが人間か』竹山博英訳, 朝日選書, 2017.

ほんまなほ「あらがう、りんしょう、てつがく」『臨床哲学ニューズレター』（5 号, pp.9-28.），大阪大学大学院人文学研究科臨床哲学研究室, 2023.

鷲田清一『聴くことの力 臨床哲学試論』TBS ブリタニカ, 1999.

鷲田清一監修, 本間直樹, 中岡成文編『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版会, 2010.

（ろくごう・そうし）